

田原藤太

楠山正雄

青空文庫

一

むかし近江おうみの国くにに田原藤太たわらとうだという武士ぶしが住すんでいました。ある日藤太とうだが瀬田せたの唐橋からはしを渡わたつて行きますと、橋はしの上に長ながき二十丈じゅうもあろうと思おもわれる大蛇おろちがとぐろをまいて、往おうら来きをふさいで寝ねていました。二つの目玉めだまがみがき上げた鏡かがみを並ならべたようにきらきらかがやいて、剣つるぎを植うえたようなきばがつんつん生はえた間あいだから、赤あかい舌したがめらめら火はを吐はくように動うごいていました。あたり前まえの人ひとなら、見みただけで目めを回まわしてしまふところでしょうが、藤太とうだは平氣へいきな顔かおをして、大蛇おろちの背中せなかの上うへを踏ふんで歩あるいて行いきました。しばらく行くと、後うしろでだしぬけに、

「もしもし。」

という声こえがしました。その時ときはじめてふり向むいてみますと、今いままでそこにとぐろをまいていた大蛇おろちは影かげも形かたちもなくなつて、青あおい着物きものを着きた小さな男おとこが、しょんぼりそこに座すわつて、おじぎをしていました。

藤太とうだは不思議ふしぎそうにその男おとこの様子ようすをながめて、

「いまわたしを呼んだのはお前か。」

と聞ききました。小男はまたていねいに頭を下げて、

「はい、わたくしでございます。じつはぜひあなたにお願いしたいことがございます。」
といいました。

「それは聞いてあげまいものでもないが、いったいお前は何者だ。」

「わたくしは長年この湖の中に住んでいる龍王でございます。」

「ふん、龍王。するとさつき橋の上に寝ていたのはお前かね。」

「へい。」

「それで用というのは。」

「それはこうでございます。いったいわたくしはもう二千年の昔からこの湖の中に住んで、何不足なく暮らしていたものでございます。それがいつごろからかあのそれ、あちらに見えます三上山に、大きなむかでが来て住むようになりました。それがこのごろになって、この湖を時々荒らしにまいて、そのたんびにわたくしどもの子供を一人ずつさらって行くのです。どうかして敵を打ちたいと思いますが、何分向こうは三上山を七巻き半も巻くという大むかでのことでございますから、よし向かって行っても勝つ見込

みがございません。そうかといって、このまま捨てておけば子供は残らず、わたくしまでもむかでに取られて、この湖の中に生きものの種が尽きてしまうでしょう。こうなると、もうなんでも強い人に加勢を頼むよりしかたがないと思ひまして、この間から橋の上に寝て待つていたのでございます。けれどもみんなわたくしの姿を見ただけで逃げて行つてしまうのでございます。これでは世の中にほんとうに強い人というものはないものかと、じつはがっかりしておりました。それがただ今あなたにお目にかかることができて、こんなにうれしいことはございません。どうかわたくしたちのために、あのむかでを退治しては頂きますまいか。」

こういつて龍王はていねいに頭を下げました。藤太はやさしい、情けぶかい武士でしたから、

「それはどうも気の毒なことだ。ではさつそく行つて、そのむかでを退治してあげよう。」
 といひました。龍王はたいそうよろこんで、

「では御案内をいたしましょう。どうかごくろうでも、湖の底の私の住まいまでお越し下さいまし。」

こういいながら橋の下に降りて、波を切つて湖の中に入つて行きました。藤太もその後

からついて行きました。しばらくすると向こうにりっぱな門が見えて、その奥に金銀でふいた御殿の屋根があらわれました。るりをしきつめた道をとおって、さんごで飾った玄関に入つて、めのうで堅めた廊下を伝わって、奥の奥の大広間へとおりました。そのすいしようをはりつめた欄干から、湖水を透かしてすぐ向こうに三上山がそびえていました。

「むかでの出ますにはまだ間がごぎいます。」

と龍王はいつて、藤太をくつろがせ、いろいろとごちそうをしているうちに時刻がたつて、だんだん暗くなつて来ました。

二

すると暗くなるに従つて、龍王の顔が青くなつて来ました。

「ああ、もうそろそろむかでがやつてまいります。」

と龍王は息をはずませながらささやきました。藤太は弓矢を持つて立ち上がりました。

やがてむこうの空がかつと燃えるように赤くなりました。すると間もなく比良の峰から三上山にかけて何千という火の玉が現れ、それがたい松行列のように、だんだんとこちらに向かつて進んで来ました。

「あれあれ、あのとおりむかですがやってまいります。どうぞはやく退治して下さいまし。」
と龍王はぶるぶるふるえながらいいました。しかし藤太はゆったりした声で、

「きつと退治てあげるから、安心しておいでなさい。」

といいながら、欄干に片足をかけて一の矢をつがえて、一ぱいに引きしぼって、切つて放しました。矢はまさしくむかでのみけんに当たりました。けれどもかんと鉄板にぶつかったような音がして、矢ははねかえつて来ました。藤太は、

「しまった。」

と叫んで、手早く二の矢をつがえて、いっそう強く引きしぼって放しましたが、これらはねかえつて来ました。もうあとに矢は一本しか残つてはおりません。むかではずんずん近寄つて来ました。龍王はがっかりして死んだようになっていました。

その時藤太はふと思いついたことがあつて、三本めの矢の根を口にくくんで、つばでぬらしました。そして弓につがえて、ひようと放しますと、こんどこそ矢はぐつさりむかで

のみけんにささりました。人間のつばをむかでがきらうということを藤太はふと思ひ出したのでした。

すると何千とない火の玉は一度にふつと消えました。大あらしが吹いて、雷が鳴り出しました。龍王も家来たちも、頭を抱えて床の上につつ伏してしまいました。

さんざん大荒れに荒れた後で、ふいとまた雷がやんで、あらしがしずまって、夏の夜がしらしらと明けかかりました。三上山がやさしい紫色の影を空にうかべていました。その下の湖にむかでの死骸はゆらゆらと波にゆられていました。

龍王は小踊りをしてよろこんで、

「お陰さまで今夜からおだやかな夢がみられます。ほんとうにありがとうございます。」
といつて、何遍も何遍も藤太にお礼をいしました。そしてたくさんごちそうをして、女たちに歌を歌わせたり舞を舞わせたりしました。

ごちそうがすむと、藤太はいとまごいをして帰りかけました。龍王はいろいろな引き止めましたが、藤太はぜひ帰るといつてきかないものですから、龍王は残念がつて、

「ではつまらない物でございますが、これをお礼のおしるしにお持ち帰り下さいまし。」

といました。そして家来にいいつけて、奥から米一俵と、絹一疋と、釣り鐘を一つ出させて、それを藤太に贈りました。そしてこの土産の品を家来に担がせて、龍王は瀬田の橋の下まで見送って行きました。

藤太が龍王からもらった品は、どれもこれも不思議なものばかりでした。米俵はいくらお米を出してもあとからあとからふえて、空になることがありませんでした。絹はいくら裁つても裁つても減りません。釣り鐘はたたくと近江の国中に聞こえるほどの高い音をたてました。藤太は釣り鐘を三井寺に納めて、あとの二品を家につたえていつまでも豊かに暮らしました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田原藤太

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>